

どう対応するか

野瀬隆平

異常なほど昨年暑かったこともあり、今年最初の勉強会のテーマとして地球温暖化を取り上げることになった。

暑かった原因としては、自然現象に係わるものと人間の活動によるものがあると云われている。自然現象としては、エルニーニョ現象や偏西風の蛇行などがあり、一方人的要因としては、温室効果ガスの排出や都市化による森林の消失などがある。

特に焦点があてられているのが炭酸ガスである。その放出量の増加が温暖化に影響していることは間違い無かろうが、これがどの程度の割合で関与しているのかを明確に示すことは難しい。また、温暖化による環境の悪化が、日常生活の中で目に見える形では現れないことも、炭酸ガス排出の削減に対して今一つ真剣に取り組まれていない理由ではなかろうか。

しかし、そうだからと云って何もしないで良いということにはならない。個人として出来ることと、社会のシステム自体を根本的に考え直すという二つの面がある。

個人的に出来ることとしては、無駄な電気や燃料を使わない。これは経済的にも納得できるので実行しやすい。問題は、社会システムをどのように変革して行くかである。大量消費を前提とする豊かな生活など、我々が普段当たり前のようになっている価値観や制度そのものを考え直す必要があるのではないか。

そんな事を討論の対象にしようかと考えているときに、能登で大きな地震が起きた。連日テレビで生々しい被害の様子が映し出される。この様な悲惨な状況を見て、同じ日本に住む自分もいつなんどき同じ場面に遭遇しても何らおかしくない。その思いがひしひしと迫ってくる。温暖化とは異なり、目に見える形で事態に備えるように迫られるのである。さすがに鈍感な自分も、これに備える何らかの行動をとらなければと思う。

ゆでガエルのように徐々に迫ってくる危険は見過ごしてしまうが、目の前に具体的な環境の激変を見せつけられて初めて本気で行動に移すというのが人間なのだろう。